京都文教中学高等学校・宗教礼拝
礼拝（らいはい）
令和4年9月26日
5号

親切にして相互協同
救抜焔口餓鬼陀羅尼経より

まだまだ暑い日が続きますが、秋分の日も過ぎようやく秋めいてきました。明日からの二日間は、半日ごとの体育祭が実施されます。生徒会の皆さんが、短時間でも精一杯できるものをと知恵を出し合い、コロナ禍での開催を実現してくださいました。皆が力を合わせ、励まし合い、助け合い、賞賛し合ってぜひとも素晴らしい体育祭になることを祈念します。

さて、本日の宗教礼拝は「救抜焔口餓鬼陀羅尼経（くばつえんくがきだらにきょう）」というお経から、周りを思いやる優しい気持ちを持つことの大切さについて考えてもらいたいと思います。

ある日、お釈迦様のお弟子の一人である阿南（あなん）尊者の前に焔口（えんく）という名の餓鬼が現れました。餓鬼とは生きている時に好き勝手に贅沢をしたため、餓鬼道に落ちた人のことをいいます。仏教では、人は亡くなった後、生きている間の行いによって六道（地獄道、餓鬼（がき）道、畜生（ちくしょう）道、阿修羅（あしゅら）道、人間（にんげん）道、天道）のうちの一つに生まれ変わると考えています。餓鬼道に落ちた者は、いくら食べても飢（う）えを満たすことができず、あるいは触れた食べ物が燃えてしまい食べることができず、土を食い泥水を飲むような苦しみを受け続けます。焔口は阿南尊者に「お前の寿命はあと三日で尽きてしまい、死後は自分と同じ餓鬼になる」と告げました。阿南尊者がこのことをお釈迦様に相談すると「今から教えるお経を唱えながら餓鬼に食べ物を施しなさい。そのお経によりほんのわずかな食べ物もどんどん増えて、多くの餓鬼が救われるので、あなたは寿命が延びて悟りをひらくことができます。」と教えました。阿南尊者がその教えに従ってお経を唱え食べ物を施したところ、多くの餓鬼が満たされて阿南尊者の徳が積まれ、長生きすることができたということです。

救抜焔口餓鬼陀羅尼経は教の中で、生者・死者を問わず他の人に分け与える心の大切さ、苦しんでいる人を見返りなく助ける気持ちの尊さ、命を平等に扱う尊い心、助けることができたことを純粋に喜ぶ尊さを伝えているのです。この経典の内容を元にして、お盆やお彼岸に「お施餓鬼の法要」という行事が行われるようになりました。餓鬼となった霊は、いつもお腹を空かせて満たされないため成仏することもかなわず、永遠とも思える長い時間を苦しむことになります。お施餓鬼の法要を行うと、お経に乗せて届けられた食べ物や飲み物を餓鬼が口にすることができ、満たされて餓鬼道から救われるとされています。餓鬼になった霊は、お施餓鬼を行なってくれた人やお供えをしてくれた人の優しさを学んで成仏し、施す側も餓鬼を救うことで徳を積むことができます。お施餓鬼の法要は、衣食住は満たされていても人を思いやる心が希薄になっている現代人にとって忘れてはならない心や考え方を思い起こし、我が身を振り返る良いきっかけとなっています。また、そのような目的意識をもって行事に参加することは、非常に意味深いことだと思います。

本校の校訓「親切にして相互協同」の精神も、言葉だけがそこにあるのではなく、毎日の生活の目的として皆さんの発言や行動に現れてくることを願います。